

TOPICS  
1

## トピックス…①

「牛乳でスマイルプロジェクト」がスタート  
—本会議、農水省など共催で8月にウェブ交流会開催—

農水省と一般社団法人Jミルクは今年6月、「牛乳でスマイルプロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは、酪農乳業関係者だけでなく、さまざまな企業、団体、地方自治体、個人などに幅広く参加してもらい、共通のロゴマークで一体感を持って、さらなる牛乳の消費拡大に取り組んでいくことが目的となっている。8月25日には、同プロジェクトのメンバーによる第1回の交流会をウェブ形式で開催し、本会議も共催者の一員として参加した。

長引くコロナ禍などで国内の牛乳消費動向が不透明となる中、令和4年度は生乳生産量が増産基調で推移し、昨年度に続いて年末年始や年度末には大幅な生乳需給の緩和が予測されている。このため、酪農乳業界以外も巻き込んで、不需求期を中心に牛乳消費拡大の取り組みの輪を広げていくため、農水省とJミルクが6月にプロジェクトを立ち上げた。参加メンバーは酪農乳業関係者をはじめ、食品メーカー、大手量販店、地方自治体、金融機関、IT（情報技術）企業、大学教授、ブロガーなど91者（8月31日現在）が登録している。

8月にウェブ形式で開催された第1回の交流会には60人以上が参加した。本会議も共催者として出席し、6月に緊急実施した「日本の酪農経営実態調査」の結果概要を説明したほか、急激な円安やウクライナ情勢など酪農家自らの取り組みでは避けられないコスト高で苦しんでいる酪農経営の実態を訴えた。また、牛乳消費の維持・定着化を図る「MILK JAPAN」活動で、これまで取り組んできた食品メーカーなどとコラボレーションした取り組み事例も紹介した。

交流会ではまた、農水省牛乳乳製品課が酪農の環境、教育面などで果たす役割や国内の生乳需給構造、Jミルクが独自の調査結果を踏まえて実施する今後の牛乳消費拡大策のポイントなどをそれぞれ説明した。

一方、北海道広尾町の酪農家・角倉円佳さん（株式会社マドリン代表取締役

役）が、大学生などを研修で受け入れ、酪農の魅力を伝えている取り組みなどを紹介した。慶応大学商学部の清水聡教授は、「応援消費後の牛乳」と題した基調講演の中で、消費者が牛乳乳製品や酪農乳業界に何か助けられたという感覚をもってもらう取り組みをすることが、さらなる応援消費につながる可能性があるなど独自の見解を示した。

参加メンバーによる意見交換では、大手量販店や食品メーカー、菓子メーカーから、牛乳の消費拡大につながるキャンペーンなどの取り組み事例が報告されたほか、レシピサイト運営者などからは、「牛乳でスマイルプロジェクト」を通じたメンバー間での新たな活動を希望する意見も出た。次回交流会は年内に開催される予定である。



Jミルク会議室からウェブ形式で開催



「牛乳でスマイルプロジェクト」の共通ロゴマーク

(牛乳乳製品を食事に取り入れることで、笑顔になってほしいというメッセージを込めている)